

日本のサッカークラブにおける育成システムの検討
—スペインの育成システムとの比較から—
大橋 健一郎 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 佐藤 馨

キーワード：スペイン、サッカー、育成

1. 緒言

近年日本のサッカーは発展してきた。しかし未だ日本サッカー協会の掲げる FIFA ランキング トップ 10 には及ばず 20 位から 30 位の間を行き来しているのが実情である。

代表強化は選手を集めての短期強化のみでなく、日々の所属チームのトレーニングによってなされるものであり、選手は突然上手くなるわけではなく、ユース年代からの育成の積み重ねによって強化されていくものである。ユース育成を怠っている国は長続きしない、という事実は世界をみても明らかで、トップレベルの強豪国あるいはトップクラブはユース育成を非常に重要視している。その先端を行くのがスペインである。現在 F I F A ランキング トップで、2008 年のユーロ大会、2010 年のワールドカップ、2012 年のユーロ大会と主な世界大会を制しており、堂々の世界一といえる。

2. 研究の目的

日本と変わらない体格差にも関わらず、2008 年のユーロ大会、2010 年のワールドカップ、2012 年ユーロ大会で優勝し、現在世界ランキング 1 位のスペインではどのような環境でユース年代の育成が行われているのか疑問をもった。そこで本研究は、日本とスペインとの育成環境の違いを明らかにし、日本のユース育成に活かせる要素を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

キーワードを「スペイン」「育成環境」として、それに関係する資料・文献を収集し、まとめた。

4. 結果・考察

1) 育成環境の違い

日本とスペインの育成年代では、主となる公式戦の体形が違う。日本ではトーナメント制による大会で、スペインではリーグ戦である。そのため、年間を通じた公式戦の数が違う。日本

では負けたら終わりということになるが、スペインでは全チームがレベルに関係なく同じ公式戦を戦えることになる。

2) 育成に対する意識の違い

日本とスペインでは指導者の役割が違う。日本では選手がサッカーを上手くなるために一生懸命指導する。しかしスペインでは指導者が誰であろうと素質のある選手は伸びていくという考えで、指導者はサッカーをするための良い環境を作ることに注力する。このことから、スペインの育成年代の選手達はどのようなプレーヤーになるかを自ら考え、練習に取り組むため、クリエイティブな選手が育ちやすいように思える。

3) 育成年代の選手に対する評価の違い

日本はウィークポイントである体格や身体能力を補うために育成年代から優れている選手を評価し、トレセンに選考し、重点的に育成する傾向がある。そのため日本の強みである賢さを評価される習慣がない。したがって恵まれた体格や、高い身体能力をもっていなくても、優れた戦術眼をもっている選手がうもれてしまう可能性がある。スペインでは、戦術眼やサッカーに対する”賢さ”等が評価を受けやすい。したがって小柄なプレーヤーが多くても世界一をとれる。

5. まとめ

トーナメントによる大会は「負けたら終わり」というプレッシャーの中戦わなければいけないので、チャレンジがしにくい。他にトーナメントによる大会は年間を通して行われるものではないので、強豪チームと弱小チームで公式戦を戦う経験に差が生まれる。リーグ主体の場合、チームの力に関係なく毎年決まった数だけ公式戦を戦うことになるので、幅広い選手に可能性が与えられる。

【引用参考文献】

村松尚登 テクニックはあるが、「サッカー」が下手な日本人 ランダムハウス講談社 (2009) 熊崎敬 JAPAN サッカーに明日はあるか 文春文庫 (2010)